パネルディスカッション
テーマ：地場産業と国際競争力

パネリスト

朝居成自氏・丸市㈱代表取締役社長
安藤暢康氏・愛知県尾張繊維技術センター/企画普及室室長
石原誠一郎氏・石豊織物㈱代表取締役専務
岩田哲治氏・岩仲毛織㈱取締役事業部長
杉本嘉久氏・津島毛織工業協同組合理事
寺井洋介氏・ユニチカ㈱デザインセンター所長/T.D.A.
中山陽子氏・㈲ヨーコ・ナカヤマ代表/T.D.A.

コーディネーター

上野昌男氏・㈱カネボウファッション研究所代表取締役/T.D.A.

上野｜T.D.A.が発足して8ヶ月になる。今日は地場産業、中でも繊維産業で将来発展するにはどうするか。国際化の中でどんな競争力があるのか、等々パネラーの方々から教えられることが多いと思う。又愛知と岐阜では行政も異なるが、尾州ということで一つの産地として今日はディスカッションを進めたい。産業の空洞化が言われているが、外に出て行かないようにするにはどうしたら良いか?

朝居｜私の会社は岐阜市でインテリアのジャガード織物のカーテンを主体に生産している。岐阜市の織物組合は15年前は300社から成り立っていたが現在では100社を切るほどになってしまった。織物の地場産業と言うよりは今ではむしろ、アパレルファッションの産地という印象が強い。そうした厳しい状況の中で私の会社は5年前からタイとの技術協力を進めて来たので、その体験談を話しの一つの糸口としたい。海外の後進国からみたら先染めのジャガードによる商品開発はまだ特殊な価値があるので、古い織機をタイに持ち込み半分ボランティアのつもりで研修生を引き受け、紋紙、織り方、品質管理等を教え3～4年たってようやく生産できるようになった。こちらでデザイン紋紙を実費で提供し見本を織って、生産をタイで行う。しかし幾つかの問題点がある。まずジャガードはタイでは高級品なので価格が高く日本の価格以上にもなること。A反B反きず引き等の考え方がわからないとのこと。デザイン企画、紋紙に対する費用の理解がない等考え方の違いがある。国際競争力を考えた場合ジャガードに関しては日本は世界一安いと思う。価値というのはデザイン、商品の内容品質、ロット、納期等全てを含めて考えるべきで、現在の価格破壊のように単に値段だけ勝負というのではなく本当の価値というのは何かが定着してこないと国際競争力が出てこない。日本の技術は先端を行き、日本製品に対する神話は非常に根強いのでその辺で我々は商売して行くべきだ。

寺井｜合繊の素材メーカーの中でデザインを担当している。生産面で染色・加工・縫製まで海外に生産地を移している。生産コスト、コストパフォーマンスということが主眼におかれ「デザインの空洞化」が起こっている。海外で生産して日本でそれを消費化するので日本の生活文化、日本人は何を欲しがっているか判らなければならない。つまり生産に近づくか消費に近づくかが問題。地場産業が海外に生産基地を持った場合にデザイン企画に対する考え方をどうするかという問題がある。海外生産の場合もそうだが、生産された物がどこで消費されるかを考えて、そこに生活する人々に向けたデザインを創作することが大切なのではないか。

石原｜インテリアの狭い範囲に携わっている一生産者の立場でいうと、今日のテーマは遠大な問題だ。デザインに関して言えば、常に感じているのは日本とヨーロッパのデザインに対する価値観の違いだ。ヨーロッパの方ではデザインの価値を法的にしっかり保護されているように思う。似たものが氾濫しないよう、日本でももっとデザインの価値を高められる方法を考えないと国際競争の突破口にならない。私の会社は、ジャガード100%なので、デザインプラス紋紙の生産が重要な要素だが、イタリアには紋学校があり毎年50人位の卒業生を出し、皆引っぱりだこであると言う。日本にはデザイン学校があっても紋学校はない。戦後50年たってもこの現状だ。地場産業として一番大事なことが欠けている。国際競争力をつける上でこのようなソフト面デザインに対する価値感の認識がまず最初に必要だ。

中山｜私は15年前にハイムに参加した時から海外を見て来たが、海外から見ると日本には自主的な流通が乏しい。例えばイタリアでは5億円程度の売り上げの会社でも国際見本市に自主的に出している。専属のデザイナーも3～4人置き、織と染の複合を考え、販売協力もしている。日本も、国際競争に生き残るには通常の流通にこだわらず、もっと地場とデザイナーが密着して、消費者が見えるようなデザインを考え、自主的に新しい流通を開拓して行くべきだ。

上野｜ヨーロッパではデザイナーと素材メーカーが密接につながっており、又国がデザイナーをバックアップしている。それにアパレルデザイナーもまず素材を見てそこからスタイルデザインを出発させる。等々、日本との違いが根本的にあるようだ。

岩田｜尾州の産地活性化に向けて、日本毛工連「王毛工」の2～3世の機やを中心に3年前ヨコのつながりを持つため尾州テキスタイルデザイナー協会をつくった。尾州フォーラムを開き、アパレデザイナーとテキスタイルデザイナーとを密接にする。流通の上でも同等の立場を作った。又柄師（デザイナー）の存在をどう見い出すか等の問題提起をして来た。今年は第二ステップとしてトレンド部会をつくり尾州カラー即ち産地としてのカラーを出す、又は機関誌を発行してヨコの認定制度を設ける等いろいろ動き始めた。